

地域研究

有償援農ボランティア事業における学生の参加意識の特徴とその変遷

今野聖士*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

1. はじめに

今日の農業において、雇用労働力不足が叫ばれるようになって久しい。雇用労働力を十分に確保するため、農家は雇用環境の充実などの工夫を行ってきた。その結果、農業センサスによれば、2010年、2015年と常雇（7ヶ月以上の期間を定めて雇用する労働者）は増加傾向にあった。すなわち、短期的な雇用では被雇用者が農外へ流出してしまうため、常雇化、あるいは社員として雇用することで、その労働力を確保してきたと言える。しかし、常雇化するためには通年かつ一定の作業を確保する必要があることから、一部の大規模野菜作経営や通年型野菜産地以外は難しい。加えて、青果物のような労働力需要のピークが激しい生産物においては、常雇が全てのピークをカバーすることは出来ず、臨時雇が不可欠であることには変わりはない。逆に言えば、確保出来る労働力によって、農家の作付可能な品目が規定されるような事態が起きているのである。臨時雇が雇用できれば労働力多投的な青果物を、常雇が確保出来ればピークの少ない通年作業が発生する品目へ、十分な雇用労働力が確保できない農家は、雇用をとりやめ、水稻や小麦・大豆といった省力的な作物となる。この対応によって農家の営農・経営としては、最適化されるものの、地域農業や生産物の販売戦略として考えると、労働投下的な青果物生産の縮小と耕種農業の拡大は、必ずしも歓迎される事態ではない。したがって、地方自治体やJA等、地域農業のあり方を考えるべき主体において、何らかの形で臨時的な労働力を支援するインセンティブが生じる。

一方で農村人口の減少、高齢化等により臨時雇の確保は困難となり、これまで以上に多様な「労働力」の給源、例えば障害者雇用やボランティア等に注目が集まっている。中でも大学生による援農ボランティアの取り組みはこれまでも一定の役割を果たしており、今後ますます重要になると考えられる。

しかし、大学生に援農ボランティアを呼びかける場合、以下の課題がある。1つ目は大学生の属性への対応である。これは本テーマの前年度までの原稿で明らかにしているが、農業に関心・関係性のない学生の参加のハードルを下げる様々な工夫である（貸出や条件の確保、農家の意識等）。2つ目はボランティア／有償水準のバランスである。これまで多くの地域で行われてきた援農ボランティアは、“無償”が基本とされていた。ボランティアである以上自発的な参加が基本となるが、農業は一般的に居住地から離れており、自発的参加のためには移動手段を要する。このため定年退職者を中心としたコミュニティが援農ボランティアの中心となっていた（心理的報酬、特に保健リクリエーション効果であることが指摘されている）。一方で大学生は、移動手段を持たないため送迎を要し、送迎に係るコストを農家が回収する必要性が生じる。また学生の農業・農村への関心は個人差が大きいため（所属学部に係る専門性の影響が大きいためと考えられる）、ボランティアに参加するためのインセンティブが異なり、とりわけ本学のような福祉医療系（≠農学系）では純粋なボランティア対象として農業を選択する学生は多くない。このため、名寄市立大学（以下「本学」）はボランティアによる心理的報酬を補完するため、有償ボランティアとしている。最低賃金に比する水準の“有償”をボランティアの範疇として良いのかという議論もあると思われるが、全産業的労働力不足下において、有償

*責任著者 E-mail:m-konno@nayoro.ac.jp

水準のみ（最低賃金水準のアルバイト）であれば、小売業をはじめとする身体的負担の少ない他産業に就業すると考えられ、本事業において最低賃金水準であっても多くの学生が参画し、また多数が継続して援農に参加していることから、本稿ではボランティアの範疇に含めている。

さて、以上のような状況を受け、2018年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの研究事業として、援農ボランティア事業を実施している。2021年度も引き続きコミュニティケア教育研究センター、名寄市農務課、JA道北なよろ営農部営農課からご支援・ご協力を頂き、学生からも有償ボランティアの協力を頂いて事業を実施した。本稿では本年度の状況を整理した上で、学生の参加意識の特徴についてアンケート調査の結果から確認していきたい。本年も昨年に引き続きコロナ禍における影響を受け、募集活動を十分に展開できなかったことや、受入農家においても外国人技能実習生の受入が出来なかったこと、感染リスクをどう捉えるか、といった点で逡巡が生じていた。コロナ禍において対面調査が叶わないため、子細について記述できない部分もあるが、可能な限り状況を整理していきたい。

2. 援農ボランティア事業実施の経緯

本節では、昨年度の報告に引き続き事業実施の経過について今野（2019）から一部を引用するかたちで整理する。なお詳細に当たっては拙稿をご参照いただきたい。

2017年の春頃から、市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が農業者から寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。結果、春夏期に計15名程度が農家アルバイトに従事した。極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなり、2018年度に事業名を「名寄市立大学生援農アルバイト事業」（現在は名寄市立大学援農有償ボランティア事業）とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学は名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当：センター企画委員兼本研究事業担当の教員）、市は経済部農務課（担当：課長）、JA道北なよろ（担当：営農部営農課長、アスパラ部会長、スイートコーン部会長）とした。大学は、コミュニティケア教育研究センターが通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援（問い合わせや募集など）を実施するほか、本事業をコミュニティケア教育研究センター課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着（ツナギ）・雨合羽の貸与を受けている。

事業期間は2期制とし、1期を5月中旬～6月下旬、2期を夏休み期間中とした。主な想定作業は1期がアスパラ関連作業、2期がスイートコーンやカボチャ関連作業である。

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチングを行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮（危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等）も万全を期した。

3. 2021年度援農ボランティア事業の経過

表1に本事業の概要を示した。運営主体はこれまでと同様、本学、名寄市、JA道北なよろで構成した。実施作業も同様で1期は5月中旬～6月下旬、2期は夏休み期間中（8月中旬～9月下旬）とした。受入農家戸数は1期14戸（昨年同数）、2期16戸（同+6戸）となり、2020年度より若干増加した。参加学生数は1期42名（昨年-4名）・2期22名（同-15名）とこちらも2020年度に比べて若干減少している。要因として、外

国人技能実習生が入国できない状況もあり、受け入れを希望する農家数が増加したと考えられる。一方で、有償の水準は昨年同額となり、かつ学生は早期にコロナウイルスワクチンの職域接種が完了したため、2期は帰省する学生が多く、参加者数が限られ、希望する農家の枠すべてを支援することは叶わなかった。

表2に事業実施にかかるスケジュールを整理した。例年3月末に1期の募集を農家に対して行い、受入希望者に集まって頂き、ボランティアの趣旨とスケジュール、事業実施体制等について説明し、有償の水準を決めて頂いており、2021年度も踏襲している。ただし、コロナ禍における影響を受け、そもそも事業実施が可能かどうか、またどのような体制で実施できるのか、昨年度ほどではないにしろ、決定に時間を要した。また学生への募集方法も、従来のような講義終了時や昼休みの説明会・相談会を実施することができず、本年度もデジタルサイネージ、オンライン講義の余白、説明サイト等を利用して広報するに留まった。参加学生に対する説明会は短時間かつ最低限の回数・時間で実施し、農家さんとの事前対面（顔合わせ会）も、組合長による挨拶の他は、小グループによる短時間の打合せに留めた。

実施に当たっては、前述のように、これまでのように対面説明会を実施する事ができなかったため、全てオンラインで実施した。説明のための簡易な特設サイト・Zoom相談受付・Google Formsを利用した参加受付と貸し出し品の集約といったオンラインツールによる広報、連絡となった。その他、アナログの手段としては、学生が講義資料を受取に来る際にデジタルサイネージを設置して広報を試みた（10名程度の申込があった）。

本事業の特徴である貸与品の貸し出しについても、対面による随時貸し出しが出来なかったことから、昨年同様、無人の換気の良い場所（資料配付場所；体育館）に学生ごとに袋詰めした貸与品を班ごとに並べ、資料配付時に各自が回収する方法である。数名が受取に現れないというトラブルはあったが、概ねスムーズに実施できた。一方で、準備の負担が大きいことやサイズが合わなかった場合にその場での調整ができないといった課題もある。

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

運営主体	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当教員） 名寄市経済部農務課(担当課長) JA道北なよろ営農部(担当課長)
実施事業	アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業
実施時期	1期:5月15日頃～6月26日頃の土日中心 2期:8月13日頃～9月12日頃(夏期休暇期間中)
募集範囲	名寄市立大学 学生(学年問わず)
受入農家	1期:14戸 2期:16戸
参加学生数(計画値)	1期:42名・延べ350名作業従事 2期:22名・延べ272名作業従事(事務局調整分のみ)

資料:事業運営資料を元に筆者作成

注:参加学生数は当初の計画値である。実際は作業進捗や学生のスケジュール変更、体調等による調整があり、若干の変動(主にマイナス方向)が想定される。

表2 事業実施に係るスケジュール

日付	内容
2020年12月頃	市役所・農協と事業開始検討について協議
2021年3月末	アスパラ生産組合全戸へ希望を照会
3月31日	農協と打合せ(実施最終判断)
4月15日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
4月19日	学生向け説明ビデオ配信開始・随時受付 参加学生向け特設説明サイト公開
5月15日	1期作業開始 作業服・長靴・雨合羽貸与開始
期間中随時	参加学生(リーダー)より状況聴取、対応
6月26日	1期事業終了・交流会中止
7月上旬	スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会
7月15日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
7月19日	学生参加受付開始(定員まで随時配置)
8月13日	2期作業開始
9月12日	2期事業終了・交流会中止

資料:事業運営資料を元に筆者作成

また事業の実施に際しては、昨年同様新型コロナウイルス感染拡大防止策の徹底を学生・農家双方に強く要請した。基本的には農林水産省の「農業者に新型コロナウイルス感染者が発生した時の対応及び事業継続に関する基本的なガイドライン」を遵守頂くよう要請した。一方で、常時のマスク着用は熱中症の危険がある事から、十分な換気・距離を取った上でマスクを外すことや、休憩の確保と言った安全管理について特に留意頂くよう要請した。結果、本事業による感染者が発生しなかったことは参加者一同の努力によるものであり、深く感謝したい。

これまで、期中、終了後に対面式の意見交換会（学生および農家それぞれ個別に実施）を行い、参加学生・農家の意見を聴取していたが、今期も実施できなかった。このため、貸与品の返却時に少人数で個別に状況を把握するよう努めた。また、各期終了後に学生・農家が一堂に会した反省会（ジンギスカンパーティー）を行っていたが、実施できなかった。単純な打ち上げ以上に、本事業の意義する貴重な機会であったため、非常に残念な結果となった。より学生の継続参加を盛り上げるような新たな工夫を考えていきたい。

4. 事業の実績

1) 第1期事業の実績

表3に参加学生の属性を示した。1年生が27名と大半を占めたが、2年生が12名、3年生3名の参加があった。学科は栄養学科が若干多くなっている。表4に単純集計した農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月はこのべ129回参加、6月はこのべ203回参加、通期ではこのべ332回の参加があった(日誌記入者のみ)。平日は講義の関係からほぼ参加はなく、土日が中心となっている。農家ごとに参加人数に差があるため、単純平均の意味合いは薄いものの、平均してこのべ20名の学生が農家の元に訪れたこととなる。

同じく表5から全体の参加状況を整理すると、学生1人あたりで見ると平均参加回数は8.1回(2019年度9.3回)、最も参加数が多い学生で14回(同17回)、少ない学生で1回(同4回)である。若干昨年より参加回数が減少しており、天候の影響によるアスパラ収穫量の減少が影響していると考えられる。

2) 第2期事業の実績

続いて本項では第2期事業の実績を各表から述べる。まず参加学生の属性を表6から確認すると、1・2年

表3 1期参加学生の属性

1年生	27
2年生	12
3年生	3
4年生	0
男性	11
女性	33
栄養	15
看護	7
社会福祉	10
社会保育	10

資料: 運営資料より筆者が作成

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

農家名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	総計	農家一戸あたり 単純平均
5月 土日	8	14	18	0	12	16	4	3	5	8	2	7	4	9	110	7.9
5月 平日	0	0	0	1	0	0	0	5	0	0	2	0	0	0	8	0.6
5月計	8	14	18	1	12	16	4	8	5	8	4	7	4	9	118	8.4
6月 土日	10	22	35	7	23	28	10	5	6	12	2	17	10	6	193	12.9
6月 平日	10	22	22	35	7	23	10	7	6	0	2	17	1	6	168	11.2
6月計	20	44	57	42	30	51	20	12	12	12	4	34	11	12	361	22.6
総計	28	58	75	43	42	67	24	20	17	20	8	41	15	21	479	29.9
うち 平日	10	22	22	36	7	23	10	12	6	0	4	17	1	6	176	11.0

注: 平日参加の場合も1回としてカウントしている

資料: 運営資料より筆者が作成

表5 参加学生間の作業従事回数の平均値

単純回数平均	8.1
フルタイム換算平均	7.5
最大単純回数	14.0
最小単純回数	1.0
最大フルタイム換算	13.0
最小フルタイム換算	0.5
合計参加回数(単純回数)	332.0
合計参加回数(フルタイム換算)	307.0
合計参加回数(全日参加)	282.0
合計参加回数(半日参加)	50.0
全日:半日比	5.64:1
残業有り回数	5.0

資料:運営資料より筆者作成

注:アンケート回答者のみ(41名)

生、女性が多く、学科に偏りは見られない。最下段の「事務局調整」とは事業実施事務局が各農家に学生のシフト配置を行った(従前通りの)ケースである。農家独自調整とは、学生の配属と貸与品の貸し出しのみ事務局で担当し、シフト配置は各農家に一任する形式である。主に過年度の経験者が参加する場合に用いている。次に表7に旬別作業従事回数を示した。2期においても可能な限り実績データを得るべく、作業日誌への記入を依頼したが、事務局調整分以外のデータ収集が難しいため、捕捉率が低い点は注意が必要である。期間を通じた参加回数は総計118回であり、平均値としては1日当たり4名が参加していた。表8に個人別の従事状況を示した。把握率(回答学生数/参加学生数)は70%である(表7も同じ)。1週間以上を最低参加期間に設定したため、平均参加回数は6.2回である。ただし、個人差が大きく、最大は19回である。コロナ禍における影響を受け、帰省をあきらめたため長く参加したいという学生や逆に帰省期間を可能な限り長く設定した学生など、各々が状況を見ながら動いた事により、個人差が大きくなっている。

5. 学生の参加意識の特徴

本節からは学生の参加意識の特徴を1期・2期それぞれ実施したアンケート結果を元に考察していきたい。1期40名、2期19名から回答があり、回収率はそれぞれ87.0%、63.3%である。1期・2期で一部質問項目が異なる設問があるが、共通項目を中心に整理した。まず表

9に学生の農作業経験の有無を示した。1期は7割以上が初めての経験であり、2期は半数が初めての経験であった。2期はとりわけ過年度も含めて本事業経験者が多い。次に表10に期別の参加動機を示した。複数回答のため比率はMA比である。MA比とは項目の回答数を「回答総数」ではなく「回答者数」で割り返したも

表6 2期参加学生の属性

1年生	14
2年生	10
3年生	6
4年生	0
男性	9
女性	21
栄養	7
看護	7
社会福祉	9
社会保育	7
事務局調整	22
農家独自調整(貸出)	8

資料:運営資料より筆者が作成

表7 旬別作業従事回数
(単純集計・回答があった分のみ)

期間	参加回数
8/12(木)~22(日)	62
8/23(月)~29(日)	29
8/30(月)~9/5(日)	15
9/6(月)~12(日)	12
9/13(月)以降	0
8月計	95
9月計	23
総計	118
従事日数	29
1日あたり最大従事人数	9
1日あたり平均従事人数	4.1

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は作業日誌に記入があったもののみ(21名分)を集計しているため、実際は上振れしている可能性が高い

表8 個人別作業従事回数
(単純集計・回答があった分のみ)

項目	参加回数
回答者数	21
把握率	70.0%
総参加数	118
最小参加数	1
最大参加数	19
平均参加数	6.2
1~4回参加	42.1%
5~9回参加	36.8%
10~14回参加	15.8%
15回以上	5.3%

資料:運営資料より筆者が作成

ので、何%の学生がその選択肢を選んだかを示している。1期・2期ともに最も多い回答が「アルバイトとして」である。1期で90%以上、2期でも84%以上の学生が選択している。一方で農作業体験・農業農村への関心が1期では50%以上、2期でも農作業体験が50%以上、農業農村への関心が37%と大きくなっており、必ずしもアルバイト“のみ”の目的ではないことが伺える。“有償部分”が主たる動機となった場合、「本事業はボランティアであるのか？」という疑問が生じる。しかし、学生にとって他に多くの選択肢がある中で（農業以外のアルバイトは天候による中止や早朝・炎天下の作業といった過酷さはない）、他産業のアルバイトとほぼ同額（あるいは若干低い）の水準においても一定の人数が本事業に参加していることは、学生の動機が必ずしも“有償部分のみ”であるとは言えない根拠となる。すなわち、金銭的な有償部分による参加動機（やりがい）をボランティアによる心理的報酬が補完しうるからこそ、学生が参加していると考えられる。

もちろん、学生によって有償部分とボランティアによる心理的報酬がどのように補完しているか、そのバランスは異なってくると思われる（だからこそアンケート結果も分散する）が、現状そのバランスが一定程度良い水準であると評価できるのではないだろうか。逆に言えば、これ以上多くの学生に援農に参加してもらうためには、有償の水準あるいは心理的報酬の大きさを拡大する必要がある。有償水準の引き上げは農家に対する金銭的な負担を高めると同時に、農家・学生双方に“金銭相当の労働を期待”させてしまう。一方で心理的報酬を引き上げることは、繁忙期である農家にとって負担が大きい。必ずしも金銭的負担が無いからと言って心理的報酬を引き上げることは農家にとって負担が低いわけではないことに注意が必要である。

次に表11・12から学生の本事業に対する評価を確認してみたい。まず表11では期別に学生が予定（想定）していた参加回数と実際の参加回数についてその差異を尋ねている。1期は班体制・週末×1ヶ月半である

表9 期別・農作業に参加した経験の有無

期別	項目	割合
1期	はじめて	77.5%
	数回経験あり	17.5%
	何度も経験あり(もしくは実家・親戚が農家)	5.0%
2期	はじめて	52.6%
	今年の1期に参加したので2回目 昨年以前に参加した事がある	15.8%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表10 期別・参加動機（複数回答・MA比）

期別	参加動機	実数	MA比
1期	アルバイトとして(小計)	37	92.5%
	アルバイトとして;主に趣味など娯楽費	23	57.5%
	アルバイトとして;主に生活費	19	47.5%
	農作業体験として	30	75.0%
	土日のみというスケジュールが都合良かった	23	57.5%
	農業・農村に興味があった	23	57.5%
	農家と交流してみたかった	15	37.5%
	農業に限らずボランティアに興味があったから	15	37.5%
	食・農を知ることによって自分の専門に役立ちそうだった	13	32.5%
	学生同士で交流できると思ったから	11	27.5%
	個人で農業アルバイトに応募するより気軽だったから	9	22.5%
	農業を支援したいと思ったから	7	17.5%
	コロナウイルスのリスクが低い活動だと思ったから	5	12.5%
	知人に誘われたから	3	7.5%
2期	純粋なアルバイトとして	16	84.2%
	夏休みの間で好きな期間というスケジュールが都合良	13	68.4%
	農作業体験として	11	57.9%
	農業・農村に興味があった	7	36.8%
	食・農を知ることによって自分の専門に役立ちそうだった	3	15.8%
	農家と交流してみたかった	3	15.8%
農業を支援したいと思ったから	3	15.8%	
農作業体験として	3	15.8%	

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数1期10、2期19で除している

表11 期別・予定参加回数と実際

項目	1期	2期
ほぼ予定通りだった	57.5%	36.8%
予定より少なくなった	27.5%	36.8%
うち天候以外が理由	36.4%	28.6%
うち天候が理由	63.6%	71.4%
予定以上に参加した	15.0%	26.3%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

ため、昨今のアスパラ不作の影響を受けつつも半数が概ね予定通り(想定していた回数参加できた)と回答している。2期は任意の時期に任意の期間参加する仕組みのため、参加希望期間が短い場合、天候の影響を大きく受けることとなり、結果として予定通りとの回答が1期よりも低下していると考えられる。ただし、その理由を天候であると回答していることから、農家や事務局としても特段の対応が取りにくいのが実情である。一方で予定以上に参加したとの回答も存在することから、事前の説明(天候の影響・参加回数の見込み等)をより丁寧に実施する必要がある。また、表12では期別に

表12 期別・有償水準の評価

項目	(比率・%)	
	1期	2期
非常に良かった(早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった)	45.0%	47.4%
良かった(早朝・労働の大変さを考えても良かった)	32.5%	26.3%
普通(早朝・労働の大変さを考えると普通の水準)	20.0%	21.1%
悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)	2.5%	5.3%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

有償水準の評価を見たものである。悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)との回答は少なく、普通から非常に良かったとの回答が大宗である。このことから、早朝(5時開始=4時起床、4時半集合)・屋外作業といった他産業と比して環境が良いとは言えない作業に対し、有償部分だけでモチベーションを維持しているとは考えにくく何らかの形で心理的報酬が参加動機を補完していると考えられる。

続いて表13~16から今後の意向について整理する。まず表13では期別に今後の事業への参加意向を尋ねている。1期・2期ともに今後も参加してみたいとする意向が8割以上となっており、事業(とりわけ農家の対応)に満足していると考えられる。表14では期別に、

表13 期別・今後の参加意向

項目	(比率・%)	
	1期	2期
積極的に参加してみたい	35.0%	47.4%
参加してみたい	50.0%	36.8%
どちらでもない	7.5%	15.8%
参加したくない	2.5%	0.0%
その他	5.0%	0.0%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表14 期別・次年度参加検討時の想定目的(MA比)

参加動機	(MA比)	
	1期	2期
アルバイトとして(小計)	97.5%	83.3%
アルバイトとして;主に趣味など娯楽費	71.8%	-
アルバイトとして;主に生活費	43.6%	-
アルバイトとして;土日のみというスケジュール重視	45.0%	-
農作業体験として	52.5%	16.7%
農家と交流してみたい	50.0%	44.4%
農業を支援したい	50.0%	5.6%
農業に限らずボランティアに興味	35.0%	-
学生同士で交流	25.0%	-
食・農を知ることによって自分の専門に役立ちそう	25.0%	11.1%
農業・農村に興味	25.0%	16.7%
個人で農業アルバイトに応募するより気軽	15.0%	0.4%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数1期40、2期18(参加予定のない1名を除いた)で除している

表15 期別・今後の要望と上位3項目のMA比

仮に次年度も参加する場合、どのような目的で参加するか(参加動機)を尋ねた。複数回答であるため比率はMA比である。有償であることを反映して1期・2期ともにアルバイトとしての目的を選択した学生が最も多くなっている。一方

表15 期別・今後の要望と上位3項目のMA比

項目	1期		2期	
	順位(位)	特に希望する上位3項目(MA比)	順位(位)	特に希望する上位3項目(MA比)
作業服等の支給	1	50.0%	4	
有償水準の向上	2	25.0%	1	36.8%
農家との交流	3	22.5%	2	36.8%
労働環境(時間帯や作業場の温度など)	4		5	
作業日数を長くしたい	5		7	
お休みや作業日変更のしやすさ	6		3	31.6%
雨天で作業中止の際の対応	6		6	
農家との連絡方法(電話以外の方法)	8		7	

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数1期40、2期18(参加予定のない1名を除いた)で除している

で、1期では半数の学生が農業体験（農作業そのものに興味関心）、農家との交流、農業の支援を理由に挙げており、これらが心理的報酬の目的であると考えられる。2期

表16 年別・1期参加者 今後農家と直接契約の予定があるか (比率・%)

項目	2020	2021
ある(現在 従事中)	22.2%	7.7%
ある(今後予定している・2期で参加する場合も含む)	20.4%	23.1%
声はかけられたが未定	11.1%	17.9%
予定していない	46.3%	51.3%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

は体験や支援は少数であり(20%以下)、農家との交流が44%と高くなっている。今後、繁忙期のためこれ以上の対応は難しいものの、より農家と学生の交流が盛んになれば、心理的報酬で満たされる部分が増えるため、継続参加を志向する学生が増加する可能性がある。また、学生同士の交流を期待する回答も25%(1期のみ実施項目)あった。コロナ禍において学年・学科を横断する集まりは講義・サークル・アルバイト共に少なくなっていると考えられることから、感染対策を十分に考慮した上で、可能な範囲で交流出来る環境を作り支援していきたい。また、農業・農村への関心をより持ってもらえるように、事務局としても何らかの心理的報酬を付与する取組を進めていきたい。とりわけ、コロナ禍の影響により、各期終了後の交流会(打ち上げパーティー)が実施できていないことから、その代替策を考えていきたい。表15では期別に今後の事業展開に対する要望項目と特に希望する項目を尋ねた(要望は複数回答、特に希望する項目は3つまでの複数回答)。1期・2期で若干優先順位が異なっている。1期は初めての学生が多いため作業服等の環境整備が最大関心であり、半数の学生が選択している。続いて有償水準の向上、農家との交流と続き、有償水準に興味はあるものの回答は1/4に過ぎず、農家との交流とおなじ水準である(農家との交流の重要性)。2期は経験者が多いため作業服等の環境整備は4位となり、有償水準の向上が1位である。続いて農家との交流、スケジュール調整と続く。ただしMA比で見ればいずれも30%台であり僅差である。やはり、学生の関心は有償水準にあるものの、飛び抜けているものではなく、多数の中の一つに過ぎないと考えられる。最後に表16では今後の援農・農業アルバイトへの参加意向を整理した。これは1期のみ項目であるため2カ年の比較とした。天候やコロナ禍の影響を大きく受けるため、細かい差を検討する意味は無いが、いずれも3割以上の学生が事業終了後に何らかの形で継続して農業に関わっていることが重要である。本事業は1期2期あわせても、のべ60名程度の事業であるが、3割の学生が継続して農業に関わり、そのうちの何割かの学生は年度を超えて参加しているとすれば、年間で100名以上の学生が参加している可能性がある。

以上のことから、本事業に参加する学生は、有償ボランティアであるため、アルバイトの代替としての参加動機を持つものの、それが唯一の動機ではなく、農家との交流や農業への関心といった心理的報酬を目的として参加していることが明らかになった。

6. 補節 学生の自由意見

学生との意見交換会が十分に実施できなかったため、事業終了後のアンケート結果から学生の総合的な感想をいくつか抜粋した。

「食卓に食べ物が並ぶことのありがたみ、農家さん、そしていつも自分自身を支えてくれている親への感謝の気持ち、お金を稼ぐことの大変さなど、援農ボランティアを通して様々な感情が芽生えました。また異なる世代の方々との交流もでき、本当に貴重な体験をすることができました。このような機会を設けていただき有難うございました。」

「名寄市立大学のパンフレットを見て、農家さんや地域の方との交流をもてることに魅力を感じていました。なので、このボランティアに参加して、地域の方との交流ができたことや、名寄について教えて頂けたことがとても良かったです。」

「私は農業に対して今まで受けてきた授業やTVの情報などから漠然としたイメージしかなく、どこか他人事

でした。しかし短い期間でも自分で実際に早起きして動いて農家さんとお話する中で、ぐっと身近に感じるようになりました。食材はどこかの誰かが作っているという印象が変わり、この方々がこういう風に作っているんだと具体的に想像してありがたみを感じられるようになりました。週末の家事や体を休める時間が減るので余裕はありませんでしたが辛くはなかったです。」

「たくさんのハネ品を見て、これからも食べ物に感謝して残さず食べようと思った。援農ボランティアでの経験は食育になるので良いと思う。」

「私たちが普段食べている野菜は農家さんが一つ一つ手作業で毎日作ってくれているからだとわかり、より食べ物を大切に食べていこうと思えました。」

「一期に引き続き農家さん先輩たちと交流できるのが魅力です。〇〇さんご夫婦は親切で、丁寧に教えてくれるため職場環境がとてもいい。地元へ帰省したとき名寄のとうもろこしが売られていて、その店長が「名寄のとうもろこしが1番美味しい!」と言ってくださり、純粹に嬉しかったという経験があった。」

「農業をあまり体験したことが無く、とても勉強になった。給料が無くても個人的にお米やとうもろこし以外の野菜の栽培などお手伝いさせてもらいたいと思った。」

「もっと体験の内容を明確化してほしいです。また、農家さんによってシフトも仕事内容も大きく異なると、事前にしておきたかったです。」

7. おわりに

以上のように「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、心理的報酬による補完によって、金銭以上の価値を学生が持ち帰れる取り組みとして定着しつつある。そのためには、昨年の繰り返しになるが、食農教育の視点を学生・農家両方が持つことが必要であり、単純な作業・労働力ではなく、多様な経験（農家との会話等も含む）をベースとした名寄ならではの体験・経験を提供する事が求められる。アンケート結果から、完璧とは言えないまでも、この取り組みに関して一定の評価が得られ、学生のレポートにつながっていることが明らかになった。さらに言えば、有償の水準と同じレベルで農家との更なる交流に期待していると言える。

本年も昨年に引き続きコロナ禍における影響を受け、制限した状況下における活動となったが、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター・名寄市農務課・JA道北なよろ営農部営農課の協力を得て、実施体制を作ることが出来た。この場をお借りして、関係各位に深く御礼申し上げます。

次年度もコロナ禍における影響が残ると想定されるため、様々な方法により、多くの学生に周知し、安全に参加していただけるよう、更なる工夫を続けていきたい。また、先に考察したように、本事業経験者による援農ボランティア・アルバイト参加者が一定数いると考えられるため、その全体像の把握を進めていきたい。また、事務局として何らかの形で心理的報酬を提供するための方策を検討している。次年度に実施していきたい。

付記

本稿は、2021年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター課題研究による「援農有償ボランティア事業」における成果の一部である。

「2. 援農ボランティア事業実施の経緯」は2019年度の筆者原稿から再校正の上収録している。初出 今野 (2019)。

参考文献

今野聖士 (2019) 援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第3号 (通巻37号) : 31-40.

今野聖士 (2020) 援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望. 名寄市立大学コミュニティア教育研究センター 年報 第4号 (通巻38号) : 33-40.

今野聖士 (2021) コロナ禍における有償援農ボランティア事業の運営方式と課題. 名寄市立大学コミュニティア教育研究センター 年報 第5号 (通巻39号) : 17-26.